「落窪物語」「枕草子」「源氏物語」の笑いについて

浦田英子

「笑」は、いついかなる時代においても、無くなることはない。人間を描く文学作品には、いうまでもなく至る所に、笑う場面が描かれる。大笑・哄笑・嘲笑・微笑・愧笑・冷笑・苦笑又快感の笑い・悲しみを糊塗する笑い等種々様々である。

落窪物語・枕草子・源氏物語にも、勿論笑う場面が描かれている。

ただ、「笑」と言えば、登場人物が笑う場面だけでなく登場人物は極めて真面目に行為し、会話しているにも拘らず読者は思わず笑いを催すこともある。又典薬助、面目駒・源典侍・末摘花・近江君等は、滑稽の要素の強い人物である。

作品の「笑」については、或巻、或箇所の笑いの要素や滑稽の人物の考察がより必要であろうと思う。

だがここでは、具体的に、「笑ふ」「うち笑ふ」「ゑむ」「うちゑむ」「ほゝゑむ」「うちほゝゑむ」「ゑみまく」「笑み栄ゆ」「笑みひろごる」等笑いに関する語から考えてみたいと思う。

ここに取り上げた作品の読後印象が、各々、異なるように、笑いの質も異なるだろう。笑いに関するこれらの語にも、何らかの相違点がありはしまいか。この仮定の上に、考察してみたものがこの稿である。

テキストは、手許にあったので、源氏物語と枕草子が、日本古典文学大系、落窪物語は日本古典全書を使った。ただし頁数を比較する時は、すべて日本古典文学大系による。

(一) 「笑ふ」という語からみた三作品

一般的な読後印象として、落窪物語や枕草子は明るく、源氏物語は沈んだ感じを受ける。この印象は「笑ふ」という語の場合、どのような結果が出るだろうか。

表(1)は、各作品の「笑ふ」の語数である。

(※頻度とは日本古典文学大系落窪物語の凡その頁数二〇〇頁に「笑ふ」という語数七〇語の割合を頻度1とする。この時、枕草子の同じく約二九〇頁に一四一語は1.4・源氏物語の同じく約二〇〇〇頁に七一語は0.1の頻度にな

るという意味である。

表 (1)

	「笑ふ」の語数	頻度
落窪物語	70	1
枕草子	141	1.4
源氏物語	71	0.1

※「笑ふ」の中には、「死にかへり笑ふ」「笑ひ死ぬ」「笑ひののしる」「わらひにくむ」「にくみ笑ふ」「笑わらふ」「興じわらふ」「わらひ興ず」「わらひねたがる」「わらひありく」「わらひまどふ」「わらひそぼる」「もどき笑ふ」「笑ひあなづる」「笑はす」「笑はる」を含む。)

表(1)をみれば分かるように、作品の量(頁数)を考えれば、枕草子が「笑ふ」の語は最も多く、次に落窪物語で、源氏物語はこれら二作品に比べ極度に少ない。落窪物語の約1/10、枕草子の約1/14である。註(1)

田中重太郎博士にならって、暗の部の代表語彙を仮に涙とし、三作品を比較してみよう。源氏物語では、一七七例(「涙」一六五例、「御涙」十例、「老いの涙」「ひとつ涙」各一例)、枕草子では三巻本・五例、能因本・七例、註(2)落窪物語は七例(「涙」五例、「涙川」「涙の川」各一例)である。「涙」という語彙は、各作品の量を考慮しても、源氏物語が他二作品の二乃至三倍はある。

「笑ふ」のは、おかしい嬉しい時ばかりでなく、悲しみの中で笑う例があるにしても、それは特殊である。「笑ふ」を明の部の代表語彙とすれば、以上の結果から一応落窪物語や枕草子は、明の文学、源氏物語は暗の文学と言えよう。

柳田国男氏は、「ワラフは、優しい気持の伴わぬもの。結果がどうなるかを考えぬか、又は寧ろ悪い結果を承知したものとも考えられる。」と言われている。註(3)氏は「笑」と「咲」を区別されていると思うが、作品の個々の「笑ふ」の例には、柳田氏の言われるワラフに該当しない場合も多い。

そこで仮に次の三つに「笑ふ」を分けて三作品の個々の例をみてみよう。

①、柳田氏の言われる前記のワラフ、嘲笑の類。

②、寛容の笑い。感心しての笑い。相手をいたわる笑い。好意的な笑い。人生の潤滑油ともいうべき笑いでむしろ結果を良い方向へ向けようとする笑い。

③、①②どちらとも決めかねるもの。場面の設定がなく単に笑っている様子といったその他の笑い。

表(2)

	計	①	②	③
落窪物語	(100) 70	(58) 41	(33) 23	(9) 6
枕草子	(100) 141	(25) 36	(54) 76	(21) 29
源氏物語	(100) 71	(14) 10	(61) 43	(25) 18

〈○内は%、以下の表でも○内は%を示す〉

表(2)は、①②③に各作品の「笑ふ」の例を分けてみたものである。(この数は読む人の感じ方・考え方によ

って多少の変動があろう。）

落窪物語で①が多いのは、少将が継母に復讐を企てる部分にある笑いが、ほとんど①に入る為である。四十一例中三十三例迄がこの復讐譚の部分の笑いである。女君を虐待した継母が、少将方から笑いおとされるわけである。これら①の笑いは柳田氏の言われる〝刃物では傷けない一種の闘争、又は優劣の露骨な決定を示す笑い〟ではあるが、笑われる継母には継子をいじめたという倫理的欠陥がある為に、笑いは明朗・闊達・率直の感がある。

①以外の笑いは、落窪姫君が、夫少将の滑稽な言い方を笑う幸福な笑い（二三八・二六〇頁）少将の母北の方が物見の帰途、落窪姫君を自邸に連れて行こうとして、少将に虚れ言を言って笑う、大らかな笑い（二七〇頁）等がある。

全体を通して落窪物語の笑いは、明朗・闊達・率直である。

枕草子の①に属すると思われる笑いは、三十六例（二十六%）程である。中で目立つのは、生昌を笑っている例八（八段）、方弘を笑っている例八（五六段、一〇八段）、家を焼かれて泣き出さんばかりの文盲の男を笑っている例四（三一四段）である。

生昌や方弘は、「官位が低いと同時に、宮廷的教養に適合しないものを持っていたからだが、実は彼らこそ政治的にも、経済的にもそして人間的にも非凡な気骨ある官吏であったことは、他の資料によって佐藤謙三氏の強調されたことでもあり。」と秋山虔氏が述べていられる。[註(5)] 杉山康彦氏は又次のように言われている。[註(6)] 「英雄時代の戦勝の笑いは、それは実力によって得た笑いだから明るいが、階級社会におけるそういう笑いは残忍で暗い。それはこの笑いの笑われる立場のものは、どんな努力をしても、その立場を脱れられないという運命にあるからである。」と（傍点筆者）そういう笑いとは、敗北者、被征服者を笑う笑いの事である。落窪物語の復讐譚にみられる笑いは、英雄時代の戦勝の笑いといった明るさがあるのに対して、これらの枕草子の笑いは、不当な嘲笑という感があり、残忍な暗さがある。

中宮定子の笑っている例（二十二例）、主上の笑い（五例）等は、ほとんど②に属する笑いである。寛容を示す笑い、明るい知的な笑い、思いやりの笑いである。②の中でも、女房達が笑っている例は、全く①の要素が無いとは言えないが、しかし「優越を示す笑い、むしろ悪い結果を予想している笑い」とも言い難い。②に入れる方が自然で、他愛なく笑い興じるといった体のものである。むしろ人生の潤滑油とも言える。「ざえ」の競い合いの中での笑い、機智、ウイットの笑いがある。[註(7)]

源氏物語では、①の笑いは落窪物語や枕草子に比べて少

ない。十例（十四％）程である。その十例中七例は、物語の登場人物が笑っている例ではない。「誰々に笑われる」「笑わせて下さるな」といった類の用い方である。残りの三例は、源典侍・末摘花・夕霧大学の学生入学の字つけ儀式の際の博士達を笑う例である。この笑われる人は、各々滑稽の要素を備えた人物である。従って不当な嘲笑と言った暗さは無い。

②に入ると思われる例は、枕草子や落窪物語にもみられる。冗談を言い合っての笑い、嫉妬する女君のさまが美しいので笑いながら男君が御気嫌を取る等である。

落窪物語・枕草子にも無い笑いで、内心困却しながら笑う、内心の不快を押し隠して笑うという例が数例ある。

内大臣が大宮に「いと不調なるむすめまうけ侍りて、もてわづらひ侍りぬ」とうれへ聞え給うて笑ひ給ふ（野③六四）鬚黒の大将が玉鬘を我物顔にするのを、内心「からし」と思いながら表面何気ない顔で笑う（真③一五三）等である。複雑な陰影のある笑いとでも言おうか。（近江君）

註(1)　「枕冊子に於ける笑い」（「国文学」S35・1）

〃(2)　源氏物語と枕草子の「涙」の語数は「枕冊子に於ける笑い」による。

〃(3)　「笑の本願―女の咲顔―」定本柳田国男集第七巻二三一頁

〃(4)　同二三五頁

〃(5)　「枕草子の人生批評」（「源氏物語の世界」所収佐藤謙三氏の論文は「平安朝宮廷文学の背景」で「文学」S24・8に記載の由である。）

〃(6)　「王朝期の笑い」（「文学」一九五三、八）

〃(7)　註(6)に同じ

（※源氏物語の引用文の下に（　）で示しているのは、（巻名・日本古典文学大系の巻数・頁）である。）

㈡「笑ふ」と「うち笑ふ」の比率からみた三作品

表(3)は三作品の「笑ふ」と「うち笑ふ」の語数を示す。㈠では「笑ふ」の語数を、三作品で比較したが、「うち笑ふ」を含めても、枕草子・落窪物語が多く、源氏物語に少ないことは変りがない。ただ源氏物語は枕草子の約1/6.5、落窪物語の約1/5の頻度で、「笑ふ」の語だけで比較したよりは、その差は縮まっている。

表(3)

	計	「笑ふ」	「うち笑ふ」
落窪物語	(100) 80	(87.5) 70	(12.5) 10
枕草子	(100) 148	(95.3) 141	(4.7) 7
源氏物語	(100) 133	(53.4) 71	(46.6) 62

表(3)で注目したいのは、落窪物語と枕草子では「うち笑ふ」が各々十二・五％、四・七％にすぎないのに対して「

笑ふ」は各々八七・五%、九五・三%を占める。しかし源氏物語では「うち笑ふ」が増していて四六・六%を占めている事である。

明解古語辞典「うち」の項をみると「㈠（動詞の前につけて）その意味を強める。㈡（動詞の前に添えて）その動作の軽いことを表わす。チョット……スル」とある。

日本文法辞典（江胡山恒明・松村明編）接頭語の項には、「下の語基にある意味を付加するものである。即ちその語基の意味を強めたり、語感をつけ加えたり、状況を象徴したり、ある、ニュアンスを与えたりするものである。」と説明されている。

個々の「うち笑ふ」の例をみても「うち」は確かにある語感・ニュアンスを与えたり、語基を強めたり、笑いの軽いことを示したりする。

換言すれば「うち笑ふ」は、笑っている人の心に、くったくのある笑いであり、あるいは作者のある感情がこめられた笑いであったりする。

反して「笑ふ」は一般に笑っている人の心に暗さはなく率直さ、明るさがあると言える。こだわりのない笑いなのである。

表(3)に示す通り、落窪物語と枕草子は、「笑ふ」が大多数を占め、源氏物語では「うち笑ふ」が約半数を占めている。源氏物語には内心のこだわり、困惑を押しつゝんで表面は笑うという例があった事と相俟って、落窪物語・枕草子は明朗、率直、闊達な文学であり、源氏物語は陰影の多い文学と言えるだろう。

㈢、「笑ふ」と「ゑむ」「うちゑむ」「ほゝゑむ」「うちほゝゑむ」「その他」の比率からみた三作品、

笑いに関する語としては、「笑ふ」「うち笑ふ」の他に「ゑむ」「うちゑむ」「ほゝゑむ」「うちほゝゑむ」「笑みまく」「笑み栄ゆ」「かたゑむ」「ゑみひろごる」等がある。

これらは少しずつ異なつた笑い方であろう。「ほゝゑむ」は（頬にまず笑みが現れるから「ほゝゑみ」であると柳田国男氏が言われている。）落窪物語の五例中、少将が「ほゝゑむ」のが三例、落窪姫君が二例である。源氏物語で「ほゝゑむ」のは、六六例中、光源氏が三五例、夕霧四例紫上三例、梅の花三例、その他頭中将・薫・匂宮・柏木等である。（枕草子に例はない。）「ほゝゑむ」のは階級的にかなり上位に位置する人であり、かなり理想的に描かれている人々である。「ゑむ」は、面白駒が笑んだりしている例があって、同じえがおにしても「ほゝゑむ」の方が上品な美しいえがおであるようである。「ほゝゑむ」「ゑむ」に「うち」がつけば「うち笑ふ」の場合と同じく、えがおを作っている人の、又作者のあるくったくある感情がこ

められていると考えてよいようである。

「笑みまく」は落窪物語四例（二一〇頁二三九〃二四八〃三〇四〃）源氏物語一例（末①二四六）計五例ある。これらの例からは、「笑みまく」は何の考えもなく、嬉しいばっかり、可愛いばっかりに、ひたすら笑むというのである。老人のほけぼけしい笑いが多く、笑む人を卑しめる気持が伴っている。

「笑み栄ゆ」は源氏物語にのみ五例ある。（末①二五六・葵①三二三・明②六六・胡②三九七・総④四三）この五例から「笑み栄ゆ」は素晴しく美しいもの（こと）を見聞して何の考えもなくたゞ笑むという意となる。これもやゝ卑しめた笑み方のようである。

「かたゑむ」「ゑみひろごる」は各々源氏物語に一例ずつである。（帚①七八・宿⑤一〇五）

「ゑむ」「うちゑむ」「ほゝゑむ」「うちほゝゑむ」「笑みまく」「笑み栄ゆ」「かたゑむ」「ゑみひろごる」等が、各々異ったえがおではあっても、「笑ふ」が声のある笑いであるに対して、声のない笑いとしてまとめられよう。

表(4)は、「笑ふ」と声のない笑い（えがお）とに分けて各作品の例をみた表である。

（※「その他」は「笑みまく」「笑み栄ゆ」「かたゑむ」「ゑみひろごる」「ゑみの眉開く」である。「ゑむ」には「ゑがち」「独りゑみす」「御独りゑみ」を含む。）

表 (4)

	計	笑ふ	小計 えがお	ゑむ	うちゑむ	ほゝゑむ	うちほゝゑむ	その他
落窪物語	(100) 89	(79) 70	(21) 19	5	5	5	0	4
枕草子	(100) 160	(88) 141	(12) 19	5	11	0	3	0
源氏物語	(100) 211	(34) 71	(66) 140	13	46	65	7	9

柳田国男氏は、前記「笑の本願」で「ヱガホは笑いの先触れでも、準備でもなく、寧ろその反対に笑うまいとする慎しみの一つである。……又ワラフは笑われる相手のある時は不快感を与えるが、ヱムには如何なる場合にもそういうことはない。」と言われている。

個々の例をみると、えがおは柳田氏の言われる笑うまいとする慎しみの笑顔の他に、嬉しがって顔をほころばせる場合、滑稽を感じはするが声を出して笑う程のこともなくえがおを作る場合、又人生の潤滑油ともいうべきえがお、別に大しておかしいこともないが、雰囲気を和げる為にえがおを作る又は人をいたわるえがお等がある。だがいずれにしても相手に不快感を与える例は、まず無いと言える。

表(4)に示す通り、落窪物語・枕草子では、「笑ふ」が各々七九％・八八％を占め、「えがお」は二一％、一二％に

過ぎないが、源氏物語ではえがおをする笑い方が六六％を占めている。これは(一)(二)と同方向の結果を示すようで、落窪物語・枕草子は、明朗・率直・活潑な一面があり、源氏物語は、穏便・沈静・複雑微妙な一面があると言えよう。

尚声のある笑いと声のない笑いという区別をすれば、「笑ふ」には「うち笑ふ」を加えるべきだろう。しかし既述した通り「うち笑ふ」は、チョット笑うの意とすべきものが大部分であり、「笑ふ」に比べて陰影のある笑い方であった。従って「うち笑ふ」は「笑ふ」とえがおをする笑いとの中間的な笑い方と考えられるのではないかと思うので表(4)では「うち笑ふ」は加えなかった。参考までに、声のある笑い「笑ふ」に「うち笑ふ」を加えると、次のようになる。

	計	声のある笑い	声のない笑い
落窪物語	(100) 100	(81) 81	(19) 19
枕草子	(100) 167	(89) 148	(11) 19
源氏物語	(100) 274	(49) 134	(51) 140

笑いに関する語について、落窪物語・枕草子・源氏物語の三作品を考えてみたが、以上をまとめてみよう。

先ず「笑ふ」という語は、枕草子が最も多く、次いで落窪物語である。これら二作品に比べて源氏物語には極度に少ない。逆に「涙」という語は、源氏物語に多く、落窪物語・枕草子には少ない。従って「笑ふ」を明の部の代表語彙、「涙」を暗の部の代表語彙とすれば、この語彙に関する限り、読後印象と同じように、枕草子や落窪物語は明の文学、源氏物語は暗の文学と言える。

更に各作品の「笑ふ」を前述した如く仮に①②③に分類した結果が表②である。

落窪物語では、①のいわゆる刃物では傷けない一種の闘争・嘲笑といった笑いが多いが、笑われる者に倫理的欠陥・容貌のユーモラスな欠陥が与えられている為に、その笑いは、闊達・明朗である。枕草子には、①の笑いは、落窪物語より少ないにも拘らず、中に生昌・方弘・家を焼かれた貧しい文盲の男を笑いなぶる例などがあって、階級的暗さといったものがある。又②の笑いでは「ざえ」の競い合いをして笑う機智・ウイットの笑いが特色であろう。源氏物語は、①が少なく、しかも交野の少将に笑われるだろうといった使用例で、登場人物が笑っている例は少なかった。加えて②の笑いが大部分を占めるわけであるが源氏物語の笑いは全般に、穏便・複雑・微妙である。源氏物語の内心の不快・困却を糊塗する笑いも他二作品にはみられないものであった。

「笑ふ」と「うち笑ふ」二語を拾い上げた時、落窪物語と枕草子に明快・率直な笑いと考えられる「笑ふ」が多く対して源氏物語は、一般に笑う人のあるいは作者のくったくを伴った笑いとみられる「うち笑ふ」が増していた。こ

れは落窪物語と枕草子は明の文学であり、源氏物語は暗の文学という先の結論と同一方向に立つものであろう。前二作品が明快・率直・闊達な面が強く、源氏物語には、複雑な「うち笑ふ」が多いのである。

「笑ふ」と「えがお」を対比しても、落窪物語・枕草子に「笑ふ」が多く、源氏物語では「えがお」が増していた。「笑ふ」が闊達率直・明快な笑いで、「えがお」が複雑・微妙・穏便な笑いと考えれば、この結果も三作品の笑いの質を示す一例となる。

以上笑いに関する語から、三作品の笑いの質をみてみたが、物語文学と随筆文学とを、一様に取り扱うことには問題があろうと思う。勿論成立時も各々異なるわけである。

だがここでは、ともかくこのような問題はおいて、文学作品であるという同一線上に乗せてまとめてみた。

人の性格によって笑い方が異なり、又笑い方によってその人の性格がある程度判断できるように、作品の中の笑い方の相違によってその作品の性格の一面を探ることはできる得るように思う。

この作品の中にみられる笑いに関する語の相違は、この意味から作品の性格の一端を示すものでもあろうと思う。そしてこの結果は、一般的な読後印象と合致するわけである。